



私の横浜

はじめに

横浜市民が、自分たちの生活と気持ちを自分たちの言葉でつづり、自分たちの手で編集して白書をつくるとすれば、どのような内容になるであろうか。そうしたものに少しでも近づけてみたいというのが、この第四回市民生活白書の課題である。もちろん、それには今日いろいろの制約が考えられるが、課題に接近する一つの試みとして、第一部を市民の生活作文の収録にあててみた。

作文は題名を「私の横浜」とし、市民が毎日の生活のなかで、横浜というまちにどんなかわりを感じているか、また、このまちでの暮らしにどんな気持ちをもっているか、といったことを書いてもらおうというものであった。その趣旨は、市の広報紙「広報よこはま」で発表され、一五九編の原稿が寄せられた。

それらの作文の多くは、生活のなかのなまの息づかいを伝えるものであった。さまざまな人によって、さまざまな問題が、なかには相互に反対の立場から書かれたものもあったが、どの作品にもほぼ共通していえることは、もっと住みよい環境、もっと暮らしよい生活を求める願いがこめられていたことである。

そして、当然のこととして、それらの願いの延長線上に考えられる問題は、私たちがともに



私の横浜

生き、ともに交わるこの地域と社会を、もっと住みよく、もっと暮らしよくするために、自治体、つまり市民と市役所のなすべき手だては何か、ということであった。

寄稿のなかに締切り後、筆者から「私の原稿は、提出しなかったことにしてほしい」と要望された一編があった。原稿には、その筆者が市役所と接触したある具体的な体験をもとにして「何年前か前、市政は私たちにも手のとどくものになると期待した。しかし、役所は、今もやっぱり変っていないのではないか」といったことが、繊細な文章で書かれていた。

この筆者は、あらかじめ白書の編集委員会に「市政に批判的な内容のものでもよろしいか」と質問し、「もちろん、歓迎します」という回答をきいた上で執筆された。しかし、原稿をだしたあとも、こういった問題を書いてだす意味についてあれこれと迷い続けたあげく、最後には「たくさんの権限と膨大な情報をもち、しかも内輪意識の強い行政に対して、私のような市民がものをいってみても、しょせん効果などないのではないか。私たちの役割は、結局は四年に一度の選挙で投票するだけのようにも思われます」と、思案の底にあるものを明らかにした。

市民参加とか情報公開とかいった言葉がたやすく使われようとしている現在、それは、心残りの一編であった。

ところで、二六〇万横浜市民のなかで、いったい「私」の同類はどのくらいいるだろうか。たとえば、浜っ子は、新住市民は、あるいは横浜に親しみがもてる人は、もてない人は、またさらには同じ住居形態に住む仲間……等々。そんなことを知るための参考資料として、第一部では作文「私の横浜」(三七編)と同時に「横浜の人たち」(一〇九ページ索引参照)をのせた。これまでややもすれば見落されがちであった、このまちのいろいろの建設現場で黙って働き続



私の横浜

*横浜にいつから住んでいるか

	全市民 の平均	作文執筆 者の平均
戦前から	9%	34%
戦後から	13	17
昭和30年から	8	10
昭和35年から	12	16
昭和40年から	25	14
昭和45年から	33	9

けている季節労働者、いわゆる出稼ぎの人たちもこの欄で紹介した。横浜市民をさまざまな側面からながめて、その特徴としていえることは、①依然として人口の激増が続いている ②平均居住年数が短く、定住性が低い ③平均年齢が若い ④産業労働者の割合が多い ⑤学歴が高い（以上「横浜の人たち」参照）⑥所得が高い（第二部「生活意識」表11参照）などである。

これらの諸特徴について、「私の横浜」の執筆者一五九名全体と全市民の平均とをくらべてみると、とくに居住年数の点ではきわだって対照的で、執筆者には持家で定住性の高い人たちの割合が多かった。こうした執筆者の傾向とはちがって、市民社会の深層にあっておそらくは作文などを書く機会の少ないであろう人たちの、もう一つの「私の横浜」を落すわけにはいかないが、それらについては、第二部「横浜の私たち」のなかでふれることになる。